

国際青年

2012年(平成24年)5月1日発行

第34号

埼玉国際青年を育てる会・会報

Saitama Association for International
Youth Volunteers

青年海外協力隊のように、 ぼくも、海外で活躍したい…

—3名の隊員が宮前小学校で出前講座—

2月13日(月)さいたま市立宮前小学校において、今年初めての出前講座が開かれました。学校からの強い希望で、今回は3名の協力隊、シニア隊員が派遣されました。6年生4学級を3グループに分け、講師のいるそれぞれの会場を30分ごとに児童のグループが回り、すべての児童が3人の話を聞く、という企画でした。

結果は大好評。皆真剣に聞き入り、なんども頷く子供たちの輝く目が印象的でした。

後日、6年生全員が書いた「感動のメッセージ集」が、講師のもとに送られてきました。

■今泉智子(としこ)さん

(青年海外協力隊20年度4次隊 ガーナ
PCインストラクター)

—もし、文字が読めなかったら—

チョコレートでなじみの深い国ガーナ。その、甘い印象とは異なるガーナの子供たちの生活を得意の映像資料と巧みな話術で説明し、児童を、異文化に引き込んでいきました。文字を読み書きできない人の割合を提示し、「なぜ学校にいけないんだろう」「もし文字が読めなかったら」など、児童に考えさせる質問を投げかけたあと、家庭を支えるために水くみなど、子供たちが懸命に働かなくてはならないとの説明に、児童たちは、自分たちの生活を重ねあわせ、感心していました。話が終わると、いつまでもたくさんの質問の手が挙がっていました。



■武田実奈さん

(青年海外協力隊 21年度1次隊 ベナン 保健師)

—苦しくない。皆、村を誇りに思う—

民族衣装で現れた講師の姿にびっくりした児童は、次々に示されるベナンの子供たちの状況を説明する武田さんの真剣な語り口に、未知の国だったベナンの田舎町に引き込まれていきました。

マラリア感染者が多く、「5歳までに亡くなる子供たちの割合は、約12%」との話に、なぜ?とのつぶやき。「病院が遠く、薬も身近にない、病気に対する知識が不足している。医療技術が低い…」との説明に驚きの顔。このような中、蚊帳の普及、手洗いの指導など、村の生活を改善しようと努力した武田さんの語りに、児童の目は、驚きから感動へと変わっていきました。村を離れる時、子供たちは、「生活は苦しくない。自分たちは、皆村を誇りに思う」と明るく自慢し、元気にダンスを披露してくれたそうです。

●	・ 出前講座	1 ~ 3
●	・ 平成23年度壮行会	3・4
●	・ 現地レポート	4 ~ 10
●	・ 留守家族の声	11
●	・ 家族連絡会	12

●	・ 帰国隊員報告会	12・13
●	・ 会員趣味コーナー	13
●	・ 新会員のご紹介	13
●	・ 小さなハートプロジェクト	14
●	・ お知らせ	14



■比企紀和さん

(シニア海外ボランティア)

20年度4次隊 インドネシア 観光業)

ー日本をとて尊敬している人々ー

スラウェシ島マカッサルの魅力を十分に伝えた異文化理解の30分でした。

住民の9割以上がイスラム教徒。朝の4時30分にはお祈りの声が町に響き、5時には、出勤。鉄道がなく、交通手段は、バイク、ペテペテと呼ばれるミニバス、そして、車は、すべて日本製。スペイン統治時代のお城の跡が映画の1シーンのように浮かび上がりました。

さすが観光のプロ。映像を駆使してのコマーシャルにうっとりとした児童に、でも、困ったこともあったよ、とほほえみます。

「時間に遅れてもケロリとしていてね」。ものにこだわらない人々は、人なつこく親切で、日本に好意を持ち、とても尊敬しているのだそうです。

比企さんの活躍で、ますます日本びいきが増えたのではないのでしょうか。

●子供たちから届いた感動のメッセージ

今泉先生へ

ー国と国がつながることは…ー

■私は、今泉先生みたいな青年海外協力隊になって、ガーナやいろいろな人々を助けていきたいです。■とても興味が持てました。自分でガーナについて調べてみようという気持ちもできました。

■現地の人々が苦勞してつくったカカオのチョコレート(私たちは)食べていることがわかりました。

■学校に行けず、働いている子供たちがいると知り、びっくりしました。■国と国がつながることは、「人」にとって大きな一歩だと思います。

武田先生へ

ー JICA は、正義のヒーローみたいー

■笑顔の絶えない貧しさにも負けないという感じ

が伝わりました。日本は、豊かなんだと思いました。■小さな命を助けられるように、たくさんの支援をできるようにがんばって行こうと思いました。■ JICA は、正義のヒーローみたいで、かっこよかった。ぼくも、JICA にあこがれた。■日本の暮らしが当たり前だけど、大変な暮らしをしている人たちも世界には、たくさんいることがわかりました。■他の国と手を取り合って平和な世界をつくっていきたいと思いました。

比企先生へ

ーぼくも、海外で活躍したいー

■(インドネシアの)良さが、先生を通してわかりました。■発展途上国の今を教えてくれたおかげで、私もお手伝いしたいと思いました。■たくさんの実体験や日本との違いを知ることができて楽しく学ぶことができました。■僕も、この仕事をやってみたいと思いました。■青年海外協力隊がどのような仕事をしているのか、外国と日本の生活はどのように違うかなど、とても分かりやすく伝わりました。今まで聞いたこともなかった青年海外協力隊に少しでも興味を持つことができました。■青年海外協力隊のように、ぼくも、海外で活躍したいと思いました。■青年海外協力隊って、すばらしいなと思いました。

●3月14日付の「埼玉新聞」地域版にも掲載されました。

今後ますます、青年海外協力隊に対する理解が深まることでしょう。(小島章裕)

ロータリークラブで出前講座

平成24年3月14日(水)午後7時から8時まで開催されました。出前先はさいたま市の大宮シティロータリークラブ(伊藤 悟会長 会員数66名)です。講師は樋口暁子氏 シニアボランティア19年度4次隊 モロッコ派遣職種・料理。開催場所は大宮区のラフォーレ清水園で大宮シティロータリークラブの例会でした。

●最初フランス語の挨拶を覚えるのは大変でしたが現地に赴任して思ったのは、言葉は生活の中で体験していき必要な単語を覚えていけば困りませんでした。

蓮田で生まれ育ち現在67歳。市長になった時は53歳でした。当時女性の市長は芦屋の市長くらいしかいませんでした。芦屋市長には子どもを愛し、人を愛せる人なら出来る仕事だと言われま



した。女性市長ということで市民が行政に関われるという意識改革ができたと思います。人を幸福にするための行政でなければなりません。

又、何故私がシニアボランティアに参加したかと言うと、市長を引退した後、自分の目線で展開できるものに挑戦したいと思ったからです。

以前、料理ボランティアの活動をしていたのでモロッコで料理というボランティアに応募しました。言葉も儘ならないまま飛び込んだのは本当に大変でしたがその大変さがなんと心地よいことか…皆さんに伝えたいです。一つ一つ体当たりでやってきたことに物凄い喜びがあって、そういう率直な喜びは日本ではなかなか感じられません。

もうひとつ感じたのはあちらの人達の素朴な優しさ、混じりつけのない人の気持ちに心が響きました。

食文化というのはなかなか理解して貰いにくいものです。モロッコではお米は野菜の一つ、海藻は食べる文化がないので海苔を食べません。モロッコの味は刺激の強いものや肉食文化です。

世界では今、大国の大統領が替る直前です。日本でも新しい形、文化を作っていくチャンスです。是非皆さんも大きな力を出していただいて、未来に向けてこの国を誇れるようにしていただきたいと思います。

●市長の経験とボランティアの経験を熱く語られました。ロータリークラブの会員もJICAのシ



ニアボランティアの活動を大いに理解された様でした。最後に伊藤会長より交通費の提供がありましたが震災の被災地へ寄付して下さいということでもたまたま感激いたしました。(濱野英美)

★平成23年度壮行会

■3次隊壮行会

2011年12月15日(木)

さいたま商工会議所会館1Fホール



穏やかな師走の午後、青年海外協力隊及びシニア海外ボランティアの23年度3次隊壮行会が行われました。今回はシニア隊員4名を含む11名の隊員がベトナムやジャマイカ、スリランカ、ウガンダなど合計11の国々へ派遣されます。星野和央会長から、育てる会の役割や支援活動について説明があり、隊員の皆さんに対しては、国際的視点を持って活動してきて欲しいという希望が述べられました。

また、来賓として、JICA 広尾センターの橋口道代次長、埼玉県国際課の瀧澤剛主査、(社)協力隊を育てる会の菊池威臣支援・事業課長から激励の言葉がありました。その後、隊員たちの自己紹介があり、それぞれが現地に持って行きたいもの、持って帰りたいものなどについて熱い思いが表明されました。



歓談の後には、隊員OBから激励の言葉があり、家族からも期待と不安の入り混じった感想が述べられました。隊員同士で顔を合わせることは今回が最後となります。隊員、家族の記念撮影の後には、互いに連絡先を交換したり、それぞれの赴任先の国や仕事についての話に花が咲き、名残惜しさを感じながら会を終えました。(中島美都里)

■ 4 次隊壮行会

2012年3月13日(火)

さいたま商工会議所会館 1F ホール



当会と協力隊OB会、シニア海外ボランティア経験者、そして御家族の24名が、10人の隊員を迎えて開催されました。隊員は一人一人、「自分の持つ技術などを現地の人に伝え根付かせたい、帰国後は赴任国と日本の架け橋になりたい」と、将に草の根外交官としての抱負を強く語ってくれました。頼もしい隊員の言葉に、激励する筈の我々が、逆に勉強させられ、元気をもらったような感じがしました。懇談の中でも言葉の壁などいろいろな困難が待ち受けていることは承知の上で、「自然体で任地の人たちの中に溶け込んでいきたい」と語ってくれたのが印象に残りました。2年後大きく成長した彼ら彼女らに会えるのが楽しみです。



ケニア、ルワンダ、ボツワナ、トンガ、マラウイ、パプアニューギニア、モンゴル、バングラデシュの8か国。義肢装具士、薬剤師、感染症対策、自動車整備、プログラムオフィサーなどいろいろな分野の精鋭です。

(大原 薫)



現地レポート

■ 本橋千愛 (所沢市)

22年度 1次隊 パラグアイ 理数科教師

みなさん、こんにちは。青年海外協力隊としてパラグアイ共和国に赴任し、約1年3か月が経過しました。日本を離れ、異なった環境でチャレンジさせてもらっていること、家族や仲間をはじめ、多くの方々に感謝しています。ここでの生活や活動のことなどをご報告し、レポートを通して、皆さんと経験を共有できたら嬉しいです。

パラグアイは南米大陸ほぼ中央に位置し、【南米のへそ】と呼ばれています。亜熱帯気候に属し、農牧業、牧畜業を主要産業としています。スペインの植民地だったため、原住民の言葉:グアラニー語と共に、スペイン語が公用語です。ここに暮らす約630万人の人々(移住者/日系人が約7千人)は、大多数がカトリック。人柄はとても大らかで温かく、人と人とのつながりをとても大事にしています。国民の大好きなスポーツはサッカー。2010年のサッカーワールドカップでは日本代表と対戦し、盛り上がりましたね。近年のパラグアイは高い経済成長率を記録していますが、国民間にかなりの経済格差があることは事実です。



学校の朝礼の様子です

私は、平成22年の6月に、パラグアイの南東部に位置するマリアアウシリアドーラ市内の半官半民の学校に配属になりました。主な目的は、①現地の先生方の授業方法の改善 ②子どもたちの算数/数学の学力向上です。パラグアイでは黒板の内容を写すだけといった(子どもたちにとって)受身の授業が主流であり、授業中に、自ら考える/その考えを発表する/友達と意見を交換するという場面が極端に少ないのです。また、カリキュラム(教育課程)やその内容もやや複雑なため、子どもたちの算数嫌いが進んでしまっているのが現状です。

パラグアイの学校は2部制（午前7時～11時、午後1時～5時）です。私の毎日の活動は、この8時間のうちで小学校1～6年生までの算数の授業に関わり、①先生方の授業を観察し、気付いたことを助言すること。合わせて子どもたちの学習の補助をすること ②先生の希望があれば、直接子どもたちに授業をすること です。授業以外の時間では、日本の文化を紹介したり（折り紙やひらがななどの文字など）、休み時間に子どもたちと一緒に遊んだりしています。学校外では、先生方を対象とする算数講習会を実施したり、日系社会のイベントに参加したりもしています。今度お祭りでソーラン節を披露することにもなっています。



パラグアイ派遣中の算数分野隊員と協力し、現地の先生方向けの講習会を行ったときの様子です



残す任期も6か月弱となりました。【日本流】をそのまま【パラグアイ流】にするということは難しいため、パラグアイに合った算数教育を日々模索する中で、力不足を痛感する毎日です。しかし、お世話になっているパラグアイの方々のためにも、自分にできることを見つけ、実行し、活動をもっと充実したものになりたいと思います。そして、共に活動することで私自身も成長して帰国できるようがんばります。

■高杉惇喜（上尾市）

21年度3次隊 パプアニューギニア 日本語教師

私が住んでいるのはパプアニューギニアのアイタベという小さな町です。アイタベはニューギニア本島北部サンダウン州にあります。移動手段は、飛行機がないため、首都から隣町ウェワクまで飛行機で行き、そこから車でこぼこ砂利道を8時間の所にあります。インフラが整っていないので、食糧や日用品は手に入りにくいですが、人々の優しさ、温かさがとても魅力的な町です。そのセントイグナシウス高校の11年生と12年生に選択で日本語を教えています。

授業内容は日本語の会話、日本文化紹介、日本の歌などを教えています。この国の人たちは時間を守る習慣がまだないため、先生も生徒ものんびりしています。40分授業も実質20分くらいしかできません。しかし、授業に来れば高いモチベーションで一生懸命日本語を勉強するので、毎日のんびり楽しく授業をしています。



活動の集大成として今年の9月には当校で隣のメルシー高校とスピーチコンテストを開催しました。このコンテストで生徒達は日本語スピーチだけでなく、日本の歌「翼をください」「上を向いて歩こう」や、踊り「ソーラン節」も披露しました。他にも生徒達による、けん玉、折り紙、ひらがななどの日本文化紹介もしました。学校の生徒や先生だけでなく、周りの地域住民も多く見学に訪れ大盛況に終わりました。このスピーチコンテストを通して生徒達のモチベーションが高まり、多くの地域住民の方たちも日本文化へ興味を持ってもらえたと思います。

また、配属先の高校だけでなく、近くの小学校何校かにも出張して、簡単な日本語の挨拶や文化紹介をしています。そのような活動のせいか、道を歩いていると、多くの人が「KONNICHIIWA!!」と日本語で挨拶してくれるようになりました。

また、日本語教師としての活動だけでなく、現
地人サーファーとアイタペサーフクラブを設立し
ました。この国は働き口が少なく、娯楽もほとん
どないため、若者たちがストレスを発散できる場
所がなく、年々治安が悪くなってきています。そ
こで、サーフィンを通して若者たちが夢を持ち、
何かを学んでくれたらと思っています。しかし、
設立したばかりなので、サーフボードがなかなか
集まらず日本やオーストラリアのサーフィン団体
に寄付を募っている状況です。



この日本から遠く離れたパプアニューギニアで
人々と共に生活し日本語を教えることで、より多
くの人の視野が広がり、人生が豊かになってほし
いと思いながら日々自分にできることを一所懸命
頑張っています。

日本に帰国したら教師になり、この貴重な2年
間で学んだ事、感じた事を多くの生徒達に伝え、
生徒達の人生をより豊かなものになるようサポー
トしていきたいです。

■加藤康宏（さいたま市）

22年度2次隊 サモア PCインストラクター



私はサモアのウエシリアナ中高等学校で生徒に
コンピュータを教えています。

サモアは大洋州に位置する島国で、人口20万人
程度のとても小さな国です。一年中常夏で、青い
空と豊かな熱帯雨林と、淡い水色やエメラルドグ

リーンや蛍光の青色など様々な色味を見せる海に
囲まれています。このような豊かな自然と共に、
サモアの人々は時計の正確な時間にとらわれるこ
となく、ゆっくりゆっくりと生活をしています。

私が配属されているウエシリアナ中高等学校は
普通科と職業訓練科が併設されており、私は高校
1、2、3年生と職業訓練科の上級生に対して授業
を受け持っています。

授業内容としては、主にコンピュータの基礎理
論とマイクロソフトオフィス（Word, Excel,
Access, PowerPoint, Publisher）の使用方法につ
いて教えています。

PowerPointの授業では、プレゼンテーション
のテーマを各自の村紹介とし、私は生徒に埼玉県
について紹介しました。生徒は皆、花火大会や埼
玉アリーナ、浦和レッズの写真に強い興味を示し
食いついてきました。私の学校にあるコンピュー
タは半数以上が15年近くも前のものばかりで、今
の日本では考えられないような動作の遅さです。
日本ではすぐに買い換えてしまうかもしれませんが、
サモアでは大切な動くコンピュータ達です。
何度も壊れては修理して大切に使用しています。



私が住んでいるサバイイ島サツパイテア村は、
村に小さな商店がほんの数軒ある程度のとても小
さな田舎の村です。道端には豚やニワトリが人と
一緒に歩いています。いつも私は豚を追いかけてま
わしながらジョギングをしています。村人の生活
はとてもシンプルです。昼間は家事をしたりプラ
ンテーションでタロイモやココナッツを取ってき
たり、昼寝をしたりしてゆっくりと過ごし、午後
からバレーボール、ラグビーや水浴びをして楽し
み、夜はお茶を飲みながらテレビを見てまたゆっ
くりと過ごすといったものです。このサバイイ島
はついつい時間が止まってしまったのではないかと
錯覚してしまう時があるくらい静かな島です。
自動車の音もテレビの音も人の話し声も聞こえず、
風の音さえも止んでしまうそんな時があるくらい

です。一見何もないような島ですが、人々のやさしさと笑顔と、底抜けに愉快的踊りと歌に溢れた豊かな時間が流れる素敵な島です。

■山口聡美（さいたま市）

21年3次隊 中国内蒙古 理学療法士
人との出会い

中国に来て1年2か月経った頃、重慶市で行われたJICA技術協力プロジェクト「中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト」のセミナーに参加しました。そこで、日本の国際医療福祉大学の先生方に会い、中国におけるリハビリについて学会で発表することの重要性や配属先での勉強会の実施方法などについてたくさんのご意見をいただきました。その後、配属先病院のリハビリ科で勉強会を行い、リハビリ評価の概念の講義とリハビリ評価についてのアンケート調査を実施。その結果を多くの人に知ってもらうために「北京国際リハビリテーションフォーラム」で発表しました。



発表原稿を配属先の同僚と共に作成する過程で、同僚達も以前行った勉強会の内容をより深く理解してくれたようでした。話す機会も多くなり、リハビリや仕事について、人生の価値観について、様々な話をしました。

忘れられないのは、「俺にも昔は情熱があった、就職1年目の情熱は2年目に少し減り、3年目に少し減り、年々減って、今はこんな状態だよ」という同僚の一言でした。

その頃、任地で医療保険改正があり、患者が激減、1日7～9名の担当患者が1～2名となり、何とも言えない日々でした。そのため、同僚の言葉を聞いた時に、似た思いを抱いている人がこんな近くにいたんだとの思いがこみ上げました。

発表は中国語で行いました。私のつたない中国語にも参加者は真摯に耳を傾けてくれました。

学会の後も同僚と勉強会を続けています。



フォーラム参加をきっかけに、同僚の考えもよく理解でき、信頼関係も深まったと感じています。

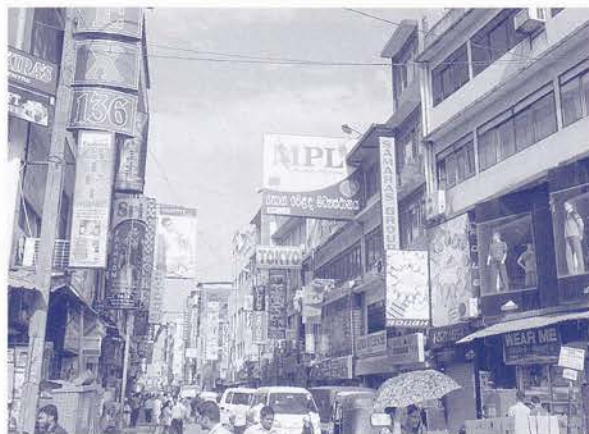
もうすぐ2年間の任期を終えて帰国することになります。赴任前は、外国に行って大きな仕事をするんだと思っていました。現実には、世界の中の1つの国の、1つの地域の、1つの病院の、1つのリハビリ科の、数人の同僚と関わる日々です。

ちっぽけな活動かもしれませんが、私はこれで良かった、これがしたかったんだと思っています。今、私の目の前で起こっていることは、2年間の積み重ねで出来たものだと思うからです。

■景山 誠（さいたま市）

23年度 3次隊 S V スリランカ 楽焼
コロンボで陶磁器を

10年ぶりに訪れたスリランカの発展は、私を大変驚かせるものであった。首都コロンボのメインストリート、ゴールロードは、かつて交通渋滞がひどく、ゴミも沢山落ちていたし、横断歩道もまったくなかったが、現在は、歩道が整備され、押しボタン式信号が設置され、一方通行化により渋滞も解消されていた。ゴミの回収は、政府が民間企業に委託し、清潔に整備されている。更にコロンボ市内を見渡すと、建設中のビルが多く、好調なアジア経済を象徴しているようである。



コロンボの雑踏



授業風景

私の配属先は、コロombo市内にある国立芸術大学である。私は、この大学の陶磁器課に籍を置き、陶磁器の製造技術を指導する予定である。始めに職場を見学したところ、これから取り組む課題を把握することができた。全ての窯が壊れていて、陶器を焼ける窯が1つも無かったので、窯の修理が優先されると思われた。さて2度目のスリランカであるが、無理をせず、楽しむことを忘れずに活動を行いたいと思う。

■小川暁子（春日部市）

22年度1次隊 中国 理学療法士
中国のリハビリステーション病院で

こんにちは。中華人民共和国河北省唐山市のリハビリステーション病院で理学療法士隊員として活動しています。

2月も終わり、こちら寒さが緩んで活動しやすくなりました。といっても、夜はまだまだ氷点下ですし、日中でも2度くらいの気温なのですが、1か月ほど前の、最高気温もプラスに届かないころに比べれば暖かく感じます。しかも、こちら中国北部ではヌアンチという室内暖房システムもきいていますし、衣服も寒さに対応しているので、日本の冬よりも過ごしやすく感じます。

私の活動しているカイルアンリハビリステー



ション病院は脳卒中や脊髄損傷で身体障害を負った方たちが機能回復、日常生活能力獲得のためにリハビリを受けに来る病院です。中国のリハビリは日本より30年遅れているといわれており、技術指導としてこの病院に赴任しました。

実際に来て見て分かったことは技術の問題だけでなく、地域全体のリハビリ認知度が低いこと、医療制度が不十分で経済的な負担が大きいこと、施設や医療者が足りないことなどの理由からリハビリを受けられない人が多いということです。発症後、長時間を経て病院に来る人も多く「基本的なりハビリだけでも受けていれば・・・」そんな患者さんを多く目にしてきました。そこで、「リハビリを必要としている全ての人たちにサービスが行き渡ることを目標に掲げ、活動してきました。嬉しいことに地域にリハビリを開設する病院も出始め、開設の支援をしたり、地域の人に配るためのリハビリ冊子を作るなど、地域におけるリハビリ普及活動に携わることができています。



中国のリハビリは日本の支援を多く受けて発展してきたため、日本のリハビリに対する信頼は篤いです。初めて任地に来たとき感じた日本と中国の違いは、仕事に対する姿勢。同僚の工作中的の態度は、よく言えば患者さんに対しフレンドリーで、仕事もゆったりとした雰囲気。その一方で患者さんに対する真剣さに欠け、与えられた仕事をやっているだけ。あまり向上心が見受けられない…。

このような状態で、臨床指導や勉強会への意欲も低く、悩んだ時期もありました。それでも、積極的に交流したり、自分が仕事に取り組む姿勢を見せたりする中で、少しずつ同僚にも変化が見られてきました。現在、患者さんを励ましなが、アイデアのあるリハビリをしている同僚を見ると、自己満足かもしれませんがとても嬉しくなります。これまで隊員が行ってきた勉強会も今月から同僚が行ってくれるようになりました。

さて、そんな同僚、日本から来た私をととても良く面倒を見てくれます。服はあるか？ 栄養は足りている？ 買い物一人で行ける？ 本当にお母さんみたいです。たまにお宅に行ってご馳走になることも。

帰国まで半年を切りましたが、同僚・近隣の人・いろいろな人に支えられて活動が続けられていることに感謝しています。

■坂本実玲（伊奈町）

22年度2次隊 フィリピン 村落開発 レイテ島からの便り

フィリピンのレイテ州マタグ・オブ町に来てから今年2月末で1年4か月が過ぎました。配属先の町役場が私に期待していたのは水牛の品種改良とミルクのプロジェクト。そちらへの興味を失いがちで勝手きままに行動する私に、初めて外国人を受け入れた配属先は当惑気味でした。

そんな私が取り組んでいるのが、農家の収入向上策としてのカカオ栽培の普及です。



まずは苗の無料配布に向けて3,000本の苗床の管理をスタート。配属先は資金援助してくれましたが、提案者はこの住人、ウィリーさん。普段は工務店のおじちゃんですが、わたしのよき上司かつパートナー、そして人生の先輩です。でも、

最初は「この人を信じて大丈夫？」と何度も疑い、失礼な質問もたびたび。それを根気よく受け止めてくれ、お互いのアイデアを足し合おうとしてくれました。

毎日、問題はでてくるけど、このような人がいるのといないとでは全然違うんだなあと実感しています。

フィリピンにカカオが入ってきたのはスペイン統治時代で、この町には特に多くのカカオが植えられています。しかし世界中のカカオ生産者に共通の悩みである虫害・病害は深刻で多くの人がカカオ生産を諦めてしまったそうです。

農薬や袋かけなどの手間と費用なしには生産は難しいのです。ここで目にするカカオの多くは、病気にかかった実がついたままだったり、小枝が伸び放題で絡み合い、枯れかかっています。

私たちの3,000本の苗床也多事多難でした。虫・かたつむり、謎のバクテリアによる被害。長雨、土砂降りかと思うと連日のカンカン照り。新芽を



食べてしまうヤギ、牛、鳥。大きくなった幹をスパッと切り落とすネズミ。

それでもなぜカカオなのかというと、カカオは近年、国内外で需要が高まり、商品価値が高まったからです。やせ地で育ち、年間を通じて収穫があり、零細農家の直接的な収入向上に結びつきやすいのです。

ここマタグ・オブ町の住民のほとんどは農業にかかわって生計を立てています。米、ココナッツ、生姜、マニラ麻。どの作物も価格低下で深刻です。カカオはこれらの作物の間に植えるのに適する性質があります。カカオ苗の配布は昨年12月から始まり、2月までに8,000本が52戸の農家に渡りました。この数字にウィリーさんはもちろん、私と距離があった配属先の町役場もニコニコ。

役場の空気もちょっと変わり始めています。「〇〇さんがカカオやりたいって言っているけど、一緒に農地調査に行こうか」と声を掛けてくれるようになりました。

でも、私にはもやもやした気持ちがあります。収穫に至るまでカカオに手を掛けられる農家は比較的裕福な層に限られるのです。農作業をする人を雇えたり、農薬や農具をさっと買える人達だけを手助けしているのではないかしらと。

そんなとき、ウガンダとザンビアで活動しているボランティア仲間や一村一品運動の研究者である大学の先輩から助言をもらい、勇気づけられました。カカオ栽培は貧困層には向かない。代わりに土地を借りてあげたり、苗作りに彼らを巻き込んだり、できる工夫はあるはず。などなど。

カカオ栽培を希望した中産層の収入を確実に上げる。これが第1ステージの目標です。

そして貧しい人たちの収入策を諦めずに取り組みます。もちろん配属先との関係も手放さずに。

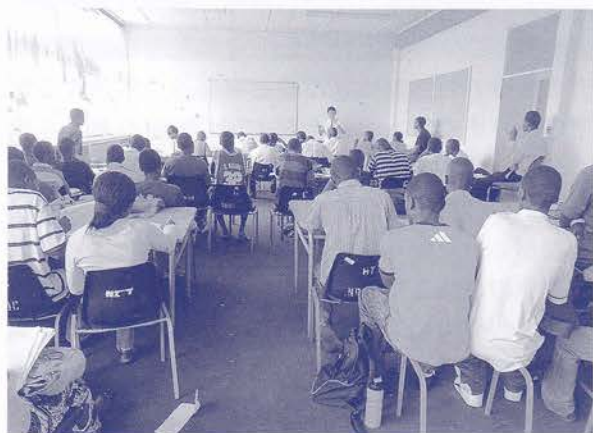


■有山滋郎（ふじみ野市）

22年度2次隊 ザンビア・農業土木

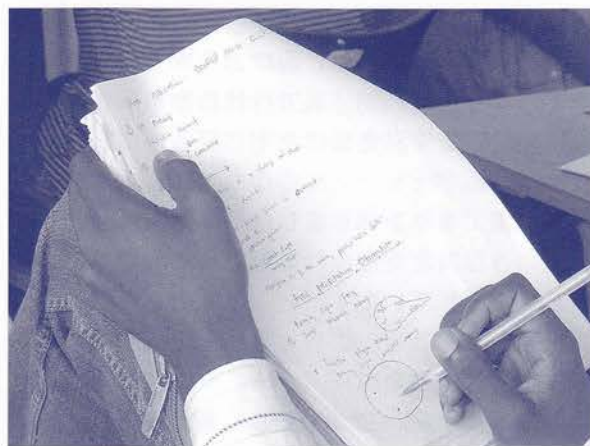
僕はザンビアの首都、ルサカにある短期大学、Natural Resources Development CollegeのWater Engineering Departmentで講師をしています。JICAからの要請通り、授業と卒業論文の指導を主に行っています。それに加え学生登録や、学費の支払いの情報の管理などもしています。

ルサカにはきれいなショッピングモールやレストランがあり、場所によってはまるで先進国のようです。少し細い道に入れば、舗装されていないぼこぼこの道、そしてその奥はコンパウンドと呼ばれるスラムのような住宅街につながっています。ルサカの大多数の住民はこのコンパウンドに住んでおり、水道、電気の無い生活を送っています。富裕層と貧困層の格差が大きいのは事実ですが、どちらも徐々に発展しています。たったの1年半の間に新しいショッピングモールができ、近所のコンパウンドでは購入できる野菜の種類が増えました。



一方大学の学習環境は満足のいくものではありません。インターネットは遅く、頻繁に接続が切断してしまいます。図書館の書籍は70年代、80年代の本がほとんどです。椅子や机の不足、教室の雨漏り、紙、インク切れなども日常に起こっています。授業風景の写真に背もたれの壊れた椅子に二人で腰掛ける学生や、椅子すらなく棚に腰掛けている学生が見えると思います。教科書も買えないためホワイトボードに書かれたことを皆きれいに書き写しています。

僕が学生だったときは空調の効いた図書館でパソコンとインターネットと豊富な文献を使い快適に勉強することができました。一つの説明でわからなければ、別の本、ウェブサイトを調べ自分に理解しやすい説明を探すことができました。そういったことがザンビアでは非常に難しく、講師の書いたテキストと自分のノートしか教材がありません。時には間違えた内容を暗記してしまったり、



授業中に聞き逃してしまった部分がどうしても理解できなかったりするようです。ザンビアに来て情報と学習環境の重要性を実感しました。

また、金銭的な問題も頻繁に起こります。コピーができなかったり、授業に必要な器具が買えなかったりするのはまだよいほうで、学費を一学期以上滞納する生徒もほぼ毎年数人はできます。大学の職員としてそれを看過する訳にもいかず、辛いですが支払いの催促をしたり、滞納を続ければ停学処分を下さなければなりません。



そんな困難もありますが、学生はとても勉強熱心です。深夜まで学生寮や、自由に使える教室で勉強しているのをよく見かけますし、わからないことがあれば質問に来ます。春休み前に学生が自宅で勉強用に練習問題をもらいに来たときにはとても驚きました。そんなザンビア人学生の力にできるだけなってやりたいと思いながら日々仕事をしています。上の写真は授業の休憩時間にエクセルを使った降水量データの処理について質問に来た学生です。彼らもいずれは卒業し、ザンビアの発展に貢献してゆくことでしょう。コンパウンドのインフラが整い、きれいなショッピングモールを普通のザンビア人が当たり前のように使える時代が来ることもそう遠くはないのではないかと思います。

★留守家族の声

夢になった「視察の旅」

有山和子（ふじみ野市）

（22年度2次隊 ザンビア・農業土木

有山滋郎さんの母）

昨年11月「視察の旅」に参加しました。私たち夫婦と2組のご家族の6人の参加。育てる会の青木さんの細やかな心づかいのお陰で、長～いフライトも何の心配もなく行ってこられました。とはいえ、やはり遠かったです。

現地の飛行場ではJICA職員さん、隊員の2人が迎えてくれ、JICA事務所と大使公邸に案内して下さいました。当日が任地校の卒業式で迎えに来られなかった息子とは大使公邸での再会となりました。大使からはザンビアの国情、日本との交友関係、青年協力隊の活動が40年も続いており、高い評価を受けていること等のお話をお聞きすることができ、その後の旅にとっても参考になりました。



私達も息子の任地校での活動の見学を楽しみにしていたのですが、諸事情で学校が休校となった為、見学はかないませんでした。それでも同僚の先生方にお会いしたり、お世話になったホストマザーの家でシマ（トウモロコシの粉でねった主食）をご馳走になったり、また息子と一緒に買い物をし、料理を作ったりと、任地での生活ぶりもわかり安心できました。親子でこんなにゆっくり過ごせたこともとても貴重な時間でした。

せっかくのアフリカ訪問でしたので他の隊員の活動も是非見学させてほしいとお願いしていたところ、快く受けていただき、スラムの中にある障がい児のスペシャルスクールを訪問しました。私達夫婦が日本でやっている障がい児・者の活動を話し、持参した写真をみて貰い、隊員のKさん（とても信頼されていました）の授業を見学しました。子ども達のいい笑顔と楽しそうな雰囲気が印象的でした。

また、村落開発普及員Oさんにも2つの村（電気、水道はありません）に案内してもらい活動の



様子を見せてもらいました。村の人達の口から「Oさん」という言葉が何度も出てきて、Oさんが大変信頼されている事が伝わってきました。村の人たちから昼食（もちろんシマです）をご馳走になり、女性達は手拍子で踊ってくれ、一人一人から丁寧な挨拶を受け、村長さんの歓迎の言葉にただただ感激でした。そして、いろいろなハプニング、困難を抱えながら地道に取り組んできたOさんの活動にも感動しました。

今回の旅では隊員の皆さんの地道な活動ぶりにふれ、現地の人たちから信頼され、また逆に現地の人々に支えられながらこの活動が続いている事を知りました。ひとまわり大きく成長させてもらった息子の元気な姿にも安心しました。私達夫婦も息子と共に多くの事を学ばせていただきました。この旅を企画し、私達を安全に案内してくださった多くの方に感謝です。

●会報「国際青年」に

原稿・写真の提供のお願い

会報「国際青年」を毎年5月および11月に発行しており、原稿を募集しています。

- 派遣される方については、派遣先での活動の様子を原稿と写真でお寄せください。「現地レポート」として、掲載させていただきます。タイトルを含め、原稿の字数は最大で600字程度で写真は2～3枚でお願いいたします。なお、一言コメントでも結構です。
- 留守家族の方も、家族の思いなどをメールやFAXでお寄せください。
- 会員のみなさんも、「読者の声」や近況そしてご意見をメールやFAXでお寄せ下さい。

★家族連絡会

日時：平成24年3月3日（土）

主催：独立行政法人国際協力機構

広尾センター（JICA 地球ひろば）

共催：青年海外協力隊埼玉県OB会

埼玉国際青年を育てる会

場所：大宮ソニックシティ研修室906



青年海外協力隊、シニア海外ボランティアとして派遣されている隊員の家族を対象に家族連絡会が開催されました。家族会員26名、OB隊員22名、来賓、主催者、共催者合わせて8名の合計56名が参加しました。

隊員を支える各種の制度や現地の状況が説明され、当会の事業内容についても紹介が行われました。また、20年度1次隊に参加された本郷舞子さんからボランティア活動の報告がありました。ジャマイカでの貴重な体験が報告され、参加者は熱心に聞いていました。その後、家族同士が情報交換できるよう交流の場が設けられました。派遣された地域別にグループが作られ、留守家族やOB、OG隊員たちとともに、活発な交流が行われました。隊員を送り出している家族の方々からは心配の声も聞かれましたが、OB、OG隊員たちの話を聞いて、隊員への応援と期待の気持ちを新たにしていました。（中島美都里）



★帰国隊員報告会

2011年11月20日（日） 埼玉会館7階会議室

晩秋の日曜午後、青年海外協力隊およびシニア海外ボランティアの帰国隊員報告会が開催されました。

埼玉国際青年を育てる会の星野和央会長の挨拶に続いて最初の報告者、今泉智子（としこ）さんがマイクをもちました。

今泉さんは平成20年度4次隊員として23年3月まで西アフリカのガーナで、情報処理技術の指導をしてきました。

首都アクラから250キロの海沿いの町タコラディの工業高校が配属先。全日制と定時制併せて3,000人の生徒でしたが、当初パソコンは3台しかなく、満足に使えるのは1台のみ。



黒板に書き込んで悪戦苦闘の授業でしたが、JICAの補助でプロジェクターが入ってからは生徒たちの興味が高まりました。その後、関係先の協力もあってパソコンも40台になりました。

明るい表情でガーナでの苦労話を披露した今泉さんには、参会者からも質問が集まりました。

次が20年度4次隊シニア隊員としてインドネシアに2年間滞在した比企紀和さん。

1万7000もの島から成る同国でも4番目の面積（日本の本州の77%）のスラウェシ島の州都マカッサルで観光開発の仕事に携わりました。

インドネシアを訪れる日本人はほとんどがバリ島観光客で、マカッサルについては資料すらないのが実情です。行ってみたら人口127万人の大都会なのでびっくり。香辛料の貿易港として有名だったそうで、この島にもっと観光客を呼び込もうというものです。

州の文化観光局に配属されましたが、日本人から見たら、この人たちの仕事ぶりはあきれるばかり。8時から4時までが勤務時間ですが、実際は9時～2時なんです。

約束の時間も30分遅れは当たり前で、悪びれる様子もなく、とがめられることもなし。いい加減

なところはありますが、人々は温厚で人なつっこく、日本人を尊敬しています。車やオートバイは9割以上が日本製です。



仕事の観光振興については、インフラ面からまだまだの感。停電は毎日2時間から8時間あり、水道水はとても飲めない。鉄道はなく道路はほとんど舗装されておらず、交通渋滞がひどい。

子供は5～6人が普通で、貧しい人たちが多く、貧困克服をしないと観光は成り立ちにくいかもしれません。しかし、魚介類や果物が豊富で、潜在的観光資源は少なくないようです。

その候補たる島内各所の写真を紹介しながら比企さんの話は続き、たちまち持ち時間が過ぎてしまいました。

最後が21年度1次隊でベナンに派遣された保健師の武田実奈さん。

ガーナに近く、面積は日本の3分の1、人口880万人のこの国は、伝統宗教のブーズー教が支配的で、一夫多妻制も残っています。そのせいか子供の数がとにかく多い。女性の地位が低く、自ら避妊を言いだしにくいものも事実。

しかし、乳児死亡率や5歳未満死亡率は日本の何十倍という高さです。幼児のマラリア罹患率が高く、貧困と無知が相まって、医療を施されないまま亡くなってしまう。病気になる前が大事で、疾患の予防の重要性を痛感しました。



配属先は保健センターという公共の病院でしたが、ここで働く人たちがすごい。定刻より2時間遅れの出勤、その後、雑談と食事をしてから仕事

を始める。医療器具が床に落ちて、拾ってそのまま使う等々。怒りがわいてきて口に出してしまい、関係が悪くなった時期もありました。

でも、ベナンで暮らすうちに、自分の価値観で他を評価するのはよくないと思うようになりました。相手の文化や習慣、価値観を受け入れ、人とのきずなを作ることの大切さ。雑談も意味があり、遅刻についてもしかり。

これがわかったのは1か月ほど休んだ時。みんながちゃんとやっててくれました。あっちも歩み寄ってくれていたんです。(山田 洋)

●会員趣味のコーナー●

「箏」 中島美都里



日本の伝統的な楽器「箏」の演奏活動をしています。「琴」のことですが、厳密には「箏」と書くのが正しい呼称です。伝統的な古曲のほか、源氏物語や百人一首などを題材にしたオリジナル曲の弾き語り、また、現代曲や童謡など幅広く演奏しています。その場の雰囲気をご来場の皆さんと共有できるのが何よりも楽しみです。1年に4回、季節毎に演奏会を開催しています。興味のある方は是非ご連絡ください。

一次回演奏会のお知らせ

「箏の響き」

- 7月7日(土) 18:00～19:30
七夕の夕べ 源氏物語に寄せて“六条御息所”
 - 11月10日(土) 14:30～16:00
秋の調べ 百人一首の世界“風”
- いずれも氷川の杜文化館

●新会員の紹介(33号発行以降入会の方)

平野 嘉仁(川口市)	木村 定平(吉川市)
安室 龍男(さいたま市)	石井 雅士(戸田市)
櫻井 健一(久喜市)	森田 武司(さいたま市)
成川 勇一(久喜市)	清水 俊男(さいたま市)
樋口 幸雄(蓮田市)	種村 真弓(入間市)

★小さなハートプロジェクト

隊員支援のために5万円寄付

ーズィマ村南東部水源整備プロジェクトー

申請者 22年度1次隊 カメルーン派遣
井上和彦（草加市）

村に近い水源は雑草が生い茂り水は淀んで不潔であるため、住民は朝夕2回、起伏の激しい悪路やジャングルの中の小道を片道30分以上かけて、水を汲みに行っている。しかもこの水汲みは女性や子供の仕事であり、1回に10キロを優に超える量を運んでいる。このため近い水源の環境を整備しフィルター作用のある簡易な貯水配水システムを構築することで住民の生活改善を図りたいとのこと。

電気の供給も不安定な陸の孤島に近いジャングルの中の村で、井上隊員は住民と同様の生活をしているため、水の確保は死活問題であることを実感している。本来、水の供給は公共の事業であるが、カメルーンの国内事情からその実現は不可能に近い。経費の一部を村民が負担し、村が提供できる資材や労働力を活用する。整備後は水管理委員会を作り住民の分担金で維持管理を行うとのことであるので、事業費23万円余の一部として、当会では隊員支援積立金から5万円を寄付しました。

●早速、井上隊員からお礼状が届きました。

東日本大震災、ここ数年続く日本経済の低迷と、日本全国が大変な渦中にあるにも拘らず、ズィマ村村民の生活改善プロジェクトの実施に出資協力をしていただき、村民一同厚く御礼を申し上げます。当該プロジェクトを通して、16世帯280人程の住民が比較的安全な水を享受することにより、他の生活への良い波及効果が発揮され、生活水準が少しでも向上することを目指します。（中略）プロジェクトに当たって不測の事態や思うように事が進まないこともあるかと思いますが、最後まで全うするように努力する所存です。改めて本出資に重ねてお礼を申し上げます。

●小さなハートプロジェクトとは、隊員が本来業務の範囲を超えて現地の人達を支援する必要に迫られたときのために、（社）協力隊を育てる会が設けた、広範囲から寄付金を集める制度。JICA現地事務所長の推薦や、現地の人達に確実に寄付金が届くことなどの条件をクリアした場合のみ対象となる。（事務局）

《お知らせ》

（1）帰国隊員の特例採用（33号以降）

埼玉県職員1人、埼玉県教員1人が採用されました。

（2）JICA 広尾センター（地球ひろば）の移転
昭和43年青年海外協力隊の訓練所として開設以来、平成18年からは「地球ひろば」として、青年海外協力隊の隊員は勿論、協力隊に関わる全ての人にとって思い入れの深いJICA 広尾センターが、閣議決定を踏まえ、本年9月末をもって閉鎖され、その機能をJICA 研究所ビル（新宿区市谷本村町10-5）内に移転することとなりました。

（3）前33号の裏表紙に掲載された絵のモデル、21年度1次隊大井聡美さん（加須市）が、東日本大震災の際、市街地が壊滅した岩手県大槌町（現職の町長も行方不明）で、図書館の再開に向けて「青年海外協力協会」社会還元活動として支援を行っている記事が、3月11日の朝日新聞（埼玉県版）に掲載されました。

■読者の声

国際青年33号を送付いただき幸甚に存じます。家族に早速見せました。孫は私の弓を引く写真などに驚いておりました。

誌面の久保貴史さんの記事にはうなずいたり共感したりと、同じような体験をした自分自身を重ねていました。（森 正弘さん）

■編集後記

スタッフや現地派遣のみなさんの理解のおかげで、「国際青年」もだいぶ充実してきたと思っています。それは、ひとえに「埼玉国際青年を育てる会」の事業が活発になったおかげです。今34号は8通の現地レポートや2回の出前講座など普段には無いものです。

これからも青年海外協力隊やシニア海外ボランティアそして留守家族のみなさんから、積極的に読んでもらえるような情報誌になれば嬉しい限りです。（高野直明）

- ・発行：埼玉国際青年を育てる会
- ・編集：広報委員会
- ・事務局：さいたま市浦和区領家
3-19-9-1101（大原事務局長宅）
TEL/FAX：048-637-8884
Mail：knikoniko789@road.ocn.ne.jp
・ホームページ：http://a-aaa.jp/kokusai/